オンコセラピー・サイエンス株式会社
会社説明会

代表取締役社長　藤谷京子

2019年5月29日

オンコセラピー・サイエンスのミッション

より治療効果が高く、
より副作用の少ないがん治療薬・治療法を
一日も早く
がんに苦しむ患者さんに届けること
がんとの闘いに勝つこと

オンコセラピーサイエンス

OncoTherapy Science,Inc.

創薬研究　/
医薬品開発事業

- がんワクチン
- 抗体医薬
- 低分子医薬

の研究開発

Cancer Precision Medicine

Cancer Precision Medicine

クリニカルシーケンス解析/
がん免疫治療開発事業

- ネオアンチゲン予測
- 全エクソーム解析
- 免疫反応解析
- リキッドバイオプシー
- がん免疫治療開発

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

OTSの革新的基盤技術　→　創薬モデル

網羅的遺伝子解析データベースに基づき、
がん細胞には作用し、ヒト正常臓器細胞には作用しない
副作用の少ない新薬候補に結びつける「創薬モデル」

1. 新鮮で多数の臨床検体（サンプル）
   - 約１０００例以上の臨床検体（患者数 20～80 名/ がん種)

2. がん特異的遺伝子の特定
   - Laser Microbeam Microdissection (LMM) system
     がん細胞および正常細胞の遺伝子発現ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ構築
   - 独自の cDNA マイクロアレイ解析

3. がん細胞の生存または増殖に必須であるかの確認
   - RNA干渉法による阻害他の確認

4. 31のヒト正常臓器細胞における発現の確認
   - 生命維持に重要なヒト正常臓器細胞で発現していない

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

2019.3期の決算状況

連結損益計算書			
（百万円）	2018.3期	2019.3期2Q	2019.3期
事業収益（売上高）	211	24	280
経常損失	2,977	1,734	2,959
親会社株主に帰属する当期（四半期）純損失	2,851	1,542	2,934
（研究開発費）	(2,931)	(1,598)	(2,826)

セグメント	医薬品の研究及び開発			がんプレシジョン医療関連事業		
（百万円）	2018.3期	2019.3期 2Q	2019.3期	2018.3期	2019.3期 2Q	2019.3 期
売上高	205	1	205	5	22	75
損失	2,475	1,126	1,786	267	483	824

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

開発パイプライン（2019.3現在）

食道がんの第Ⅲ相試験（塩野義導出済）を筆頭に、
3分野（低分子、がんワクチン、抗体）のすべてで、治験段階の開発が進んでいる

	化合物	標的/疾患	非臨床試験	第Ⅰ相 臨床試験	第Ⅱ相 臨床試験	第Ⅲ相 臨床試験
低分子	OTS167	MELK（白血病） MELK（乳がん）	→	→		
	OTS964等	TOPK	→			
ペプチドワクチン	S-588410 （塩野義製薬導出）	食道がん（開発支援） 膀胱がん	→	→	→	→
	S-488210 （塩野義製薬導出）	頭頸部がん	⇢	⇢	⇢	
	S-588210 （塩野義製薬導出）	固形がん	⇢	⇢		
	OTSGC-A24	胃がん （医師主導治験）	→	→		
抗体	OTSA101	滑膜肉腫	→	→		
	KHK6640 （協和発酵キリン導出）	アルツハイマー型認知症	⇢	⇢		

注：実線は当社開発中（開発支援含む）、点線は導出済み（導出先の製薬会社が開発中）

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

MELK阻害剤

- MELK（Maternal Embryonic Leucine Zipper Kinase）は、多くのがんで発現が上昇している
- 精巣以外の正常組織では低発現している
- がん細胞及びがん幹細胞の増殖・生存に重要である
- MELK阻害剤OTS167は、ヒトがん細胞移植モデル（マウス）でMELK特異的かつ強い抗腫瘍効果を認めている

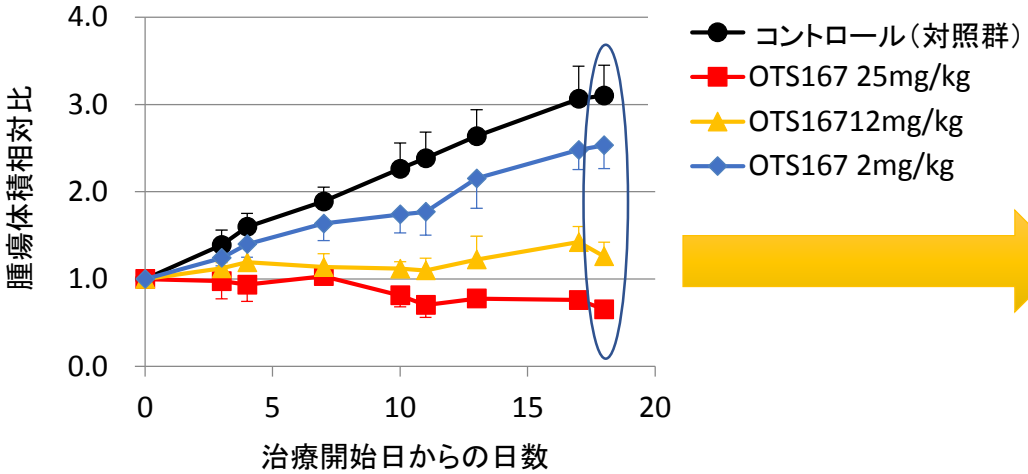
➢ **MELKに対して高い阻害活性**

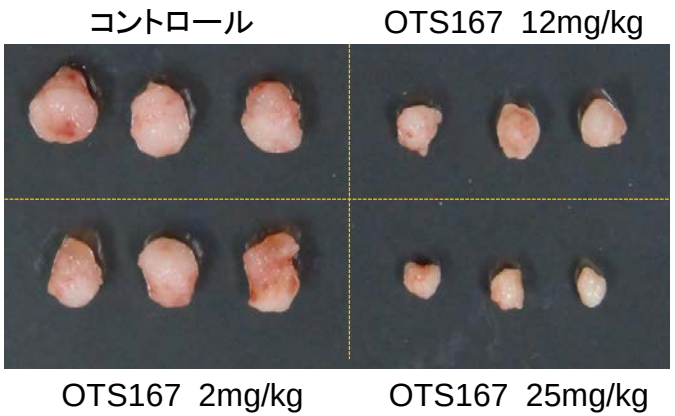
OTS167 IC_{50} = 1.1 nM　　*IC50；半数阻害濃度。低い値を示す程阻害剤としての効果が高いとされる。

➢ **MELK発現がん細胞に対して選択的に有意な細胞増殖阻害活性**

A549	IC50 =	8.9 nM	（肺がん細胞；MELK発現）
T47D	IC50 =	5.3 nM	（乳がん細胞；MELK発現）
DU4475	IC50 =	3.3 nM	（トリプルネガティブ乳がん細胞；MELK発現）
HT1197	IC50 =	120.0 nM	（膀胱がん細胞；MELK非発現）

➢ **ヒト腫瘍移植マウスにおいて強い抗腫瘍効果**





出典:OTS社内資料

OTS167臨床開発状況

- 2013年8月ファースト・イン・ヒューマン試験開始
- ヒトにおける安全性確認が主目的
- OTS167静脈内投与に対する安全性・忍容性が確認されたため、2017年4月試験終了

ステージ	第1相
対象疾患	進行性・治療不応・再発固形がん
投与経路	静脈内
治験実施施設	シカゴ大学（アメリカ）
目的	OTS167投与後の安全性、忍容性確認 用量制限毒性（DLT）、最大耐量（MTD）確認 体内薬物動態の確認
結果	OTS167静脈内反復投与への良好な忍容性が認められた

OTS167臨床開発状況

- **2016年12月経口投与での薬物動態（経口吸収性）試験実施**
- **OTS167経口投与で良好な経口吸収性が認められた**

ステージ	第1相
対象	健常成人
投与経路	経口（液体）
治験実施施設	オーストラリア
目的	経口投与での安全性、忍容性の確認 薬物動態・経口吸収性の確認
結果	OTS167経口投与（低用量）の安全性が確認された 良好な経口吸収性が認められた

OTS167臨床開発状況

- **2016年8月血液がん患者を対象とした第1/2相試験開始**
- **静脈内反復投与での安全性、最大耐量確認が主目的**

ステージ	第1/2相
対象疾患	治療不応・再発白血病 （急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病、慢性骨髄性白血病、骨髄異形成症候群、骨髄増殖性腫瘍）
投与経路	静脈内
治験実施施設	シカゴ大学、コーネル大学（アメリカ）
目的	第1相 OTS167反復投与（連日）の安全性、忍容性確認 用量制限毒性（DLT）、最大耐量（MTD）確認 体内薬物動態の確認 第2相 推奨投与用量・用法での安全性・有効性確認

OTS167臨床開発状況

- **2017年5月乳がん患者を対象とした第1相試験の患者登録開始**
- **経口投与での安全性・忍容性確認が主目的**

ステージ	第1相
対象疾患	治療不応・再発乳がん（トリプルネガティブ乳がん含む）
投与経路	経口（カプセル）
治験実施施設	MDアンダーソンがんセンター、コーネル大学、ノーウォーク・ホスピタル、メモリアルスローンケタリングがんセンター（アメリカ）
目的	OTS167経口反復投与の安全性、忍容性確認 用量制限毒性（DLT）、最大耐量（MTD） 体内薬物動態の確認 トリプルネガティブ乳がんにおける有効性（副次的）

OTS167臨床開発：今後の開発方針

- 実施中の治験についてはより早く結果が得られるように進めていく
- 血液がん、固形がんの両方を対象に開発を継続する
- 注射剤（静脈内）とカプセル剤（経口）の両投与経路での開発を継続する

TOPK阻害剤

- TOPK（T-LAK cell Protein Kinase）は、急性骨髄性白血病（AML）を含んだ多くのがんで発現が上昇している
- 精巣以外の正常組織では低発現している
- がん細胞の分裂に関与し、増殖を促進させる
- OTS964をはじめ、複数のTOPK阻害化合物を創出している

➢ TOPKに対して高い阻害活性

OTS964	IC_{50}	= 28 nM
TOPK Compound 1	IC_{50}	< 10 nM
TOPK Compound 2	IC_{50}	< 10 nM

＊ＩＣ50；半数阻害濃度。低い値を示す程阻害剤としての効果が高いとされる。

➢ TOPK発現がん細胞に対して選択的に有意な細胞増殖阻害活性

		OTS964	Compound 1	
LU-99	IC50 =	7.6 nM	13 nM	（肺がん細胞；TOPK発現）
MDA-MB-231	IC50 =	73 nM	60 nM	（トリプルネガティブ乳がん細胞；TOPK発現）
HT29	IC50 =	290 nM	>1000 nM	（大腸がん細胞；TOPK非発現）

出典:OTS社内資料

TOPK阻害剤開発：今後の開発方針

- OTS964を含めTOPK化合物について非臨床試験実施中
- TOPK化合物の最適化検討を継続し、より効果の強い化合物開発を進める

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

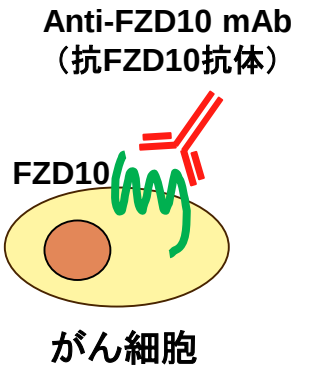
- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

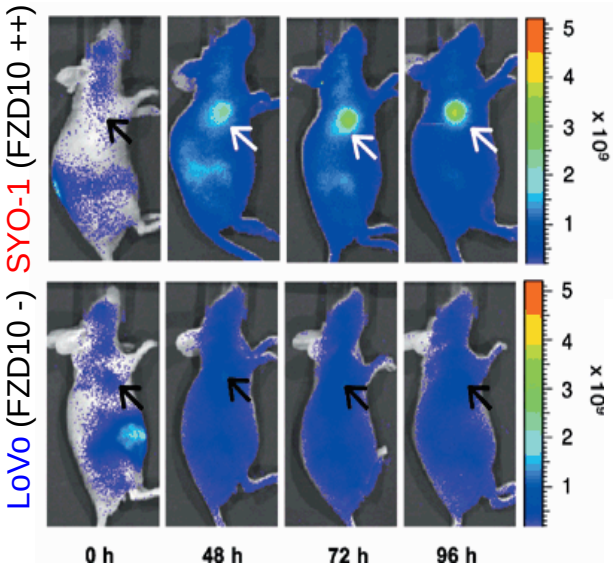
5）株式会社 Cancer Precision Medicine

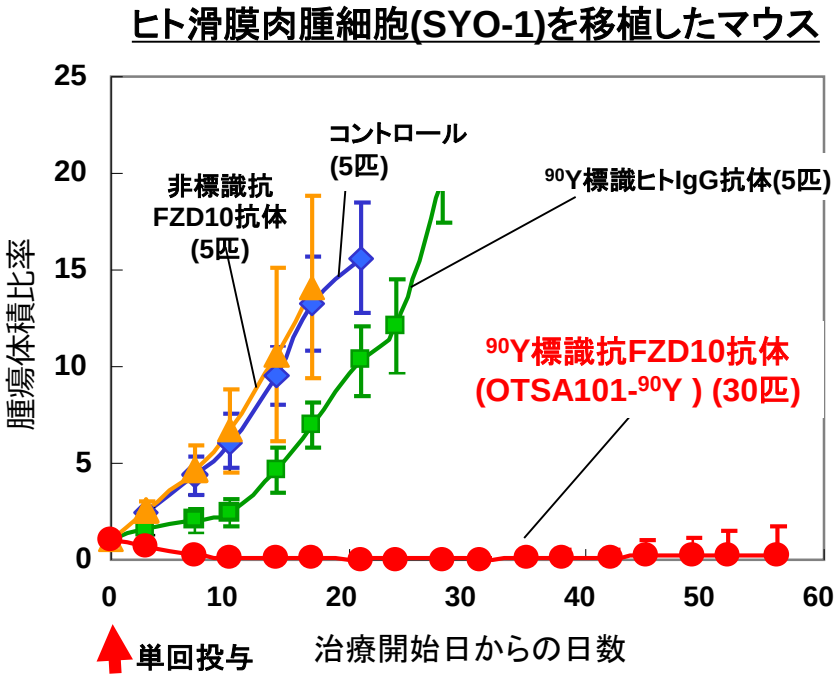
- 受託事業および研究開発

抗FZD10抗体

- FZD10 は滑膜肉腫に特異的かつ高頻度に高発現している
- 胎盤以外の正常臓器では発現していない
- FZD10は細胞膜に発現している
- FZD10をターゲットとした抗体（抗FZD10抗体）は、生体内でFZD10 陽性滑膜肉腫へ特異的に集積する
- 放射性核種である90Yを結合させたOTSA101（抗FZD10抗体）は、滑膜肉腫細胞移植マウスに対して強い抗腫瘍効果を示す







出典:Fukukawa et al., Can Sci (2008),Vol99,No,2.432-440、 OTS社内資料

OTSA101-^{90}Y 臨床開発状況と今後の方針

- フランスにおいて滑膜肉腫患者を対象とした医師主導第Ⅰ相臨床試験を終了（安全性、腫瘍集積を確認）
- OTSA101-90Yはオーファンドラッグとして開発：欧州医薬品庁（EMA）、米食品医薬品局（ＦＤＡ）によるオーファンドラッグ指定
- 日米欧の規制当局と次の臨床試験を検討する（オーファンドラッグ活用）
- 滑膜肉腫における承認申請（日米欧）を目指す
- 他のがん種の追加適応を検討する

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

がんワクチン開発状況

	化合物	標的/疾患	非臨床試験	第Ⅰ相 臨床試験	第Ⅱ相 臨床試験	第Ⅲ相 臨床試験
ペプチドワクチン	S-588410 （塩野義製薬導出）	食道がん（開発支援） 膀胱がん	→	→	→	→
	S-488210 （塩野義製薬導出）	頭頸部がん	⇢	⇢	⇢	
	S-588210 （塩野義製薬導出）	固形がん	⇢	⇢		
	OTSGC-A24	胃がん （医師主導治験）	→	→		

注：実線は当社開発中（開発支援含む）、点線は導出済み（導出先の製薬会社が開発中）

- 固形がん患者を対象としたS-588210第1相試験をイギリスで開始
- 胃がん患者を対象としたOTSGC-A24とオプジーボ併用第1相試験をシンガポールで開始

目次

1）OTSの特長

2）当期の決算状況

3）開発パイプライン

4）研究開発の進捗状況

- 低分子研究開発状況
- 抗体医薬開発状況
- がんワクチン開発状況

5）株式会社 Cancer Precision Medicine

- 受託事業および研究開発

Cancer Precision Medicineのミッション

がんプレシジョン医療

適切な人に適切なタイミングで適切な治療を

がん患者さんの 遺伝子解析	→	分子標的療法の 選択および開発

- 生存率の向上
- 高精度にがんを狙う
- 副作用の緩和

CPM社の受託事業および研究開発

Cancer Precision Medicine

全エクソーム/RNAシーケンス/ネオアンチゲン解析

がん遺伝子変異解析および遺伝子発現情報解析によって、薬剤選択につながる情報や、個別化がん免疫治療に応用可能な情報を提供します。

免疫反応解析

ELISPOTおよびMHCテトラマー染色を用いた抗原特異的な免疫反応の解析は、免疫治療による効果の測定に有用です。

リキッドバイオプシー

血漿中のがん変異由来DNAを検出することにより、がんの早期発見や再発モニタリングを可能にします。

TCR/BCRレパトア解析

T/B細胞受容体レパトア解析により、免疫関連分野の研究開発を促進し、患者さん毎に適切な免疫治療の提供に貢献します。

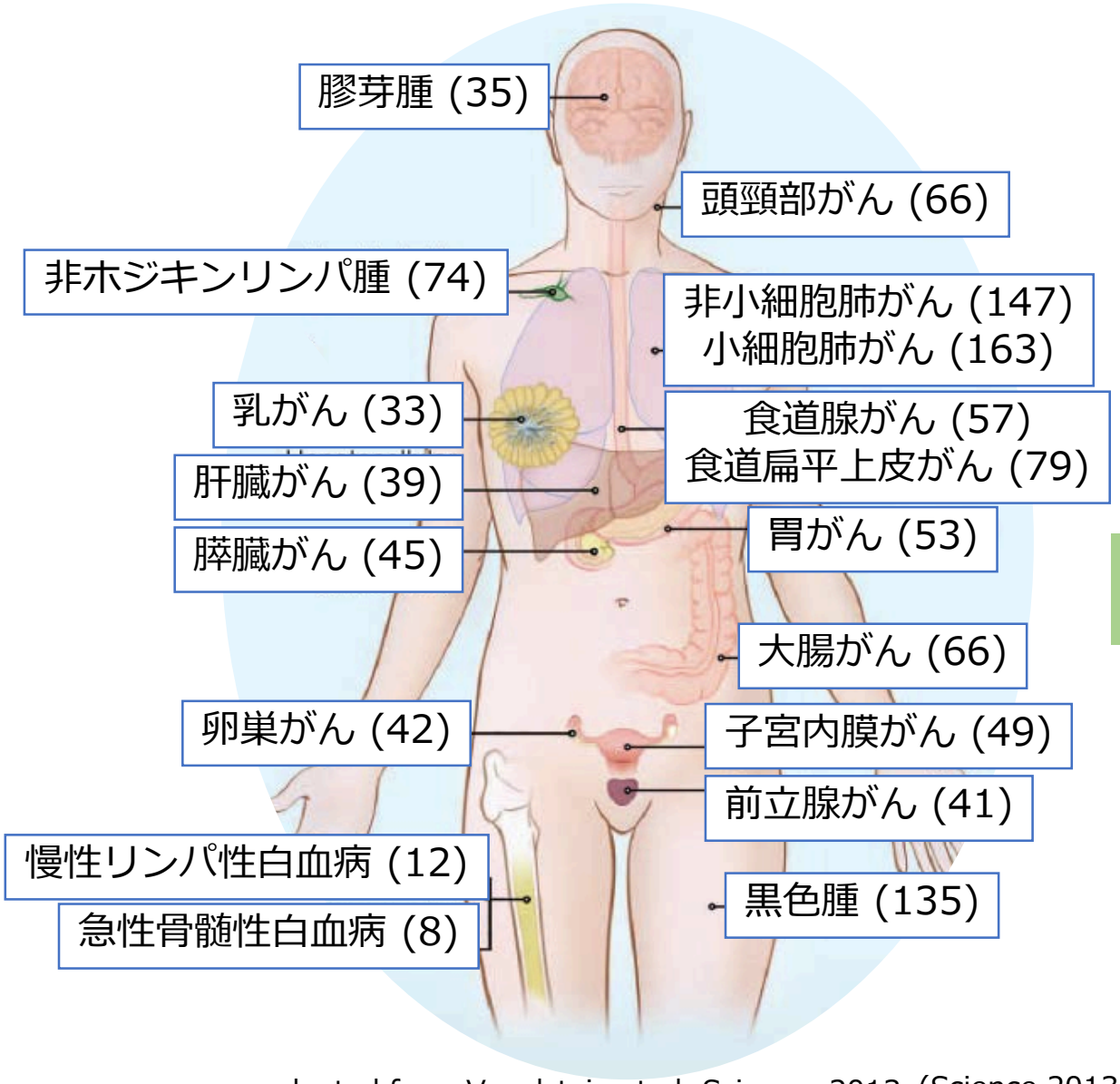
適切な治療薬・治療法の選択

免疫療法の研究開発

早期発見・再発モニタリング

がんは遺伝子の異常によって起こる

Cancer Precision Medicine



がんの種類別
アミノ酸を変える
遺伝子変異の数
（中央値）

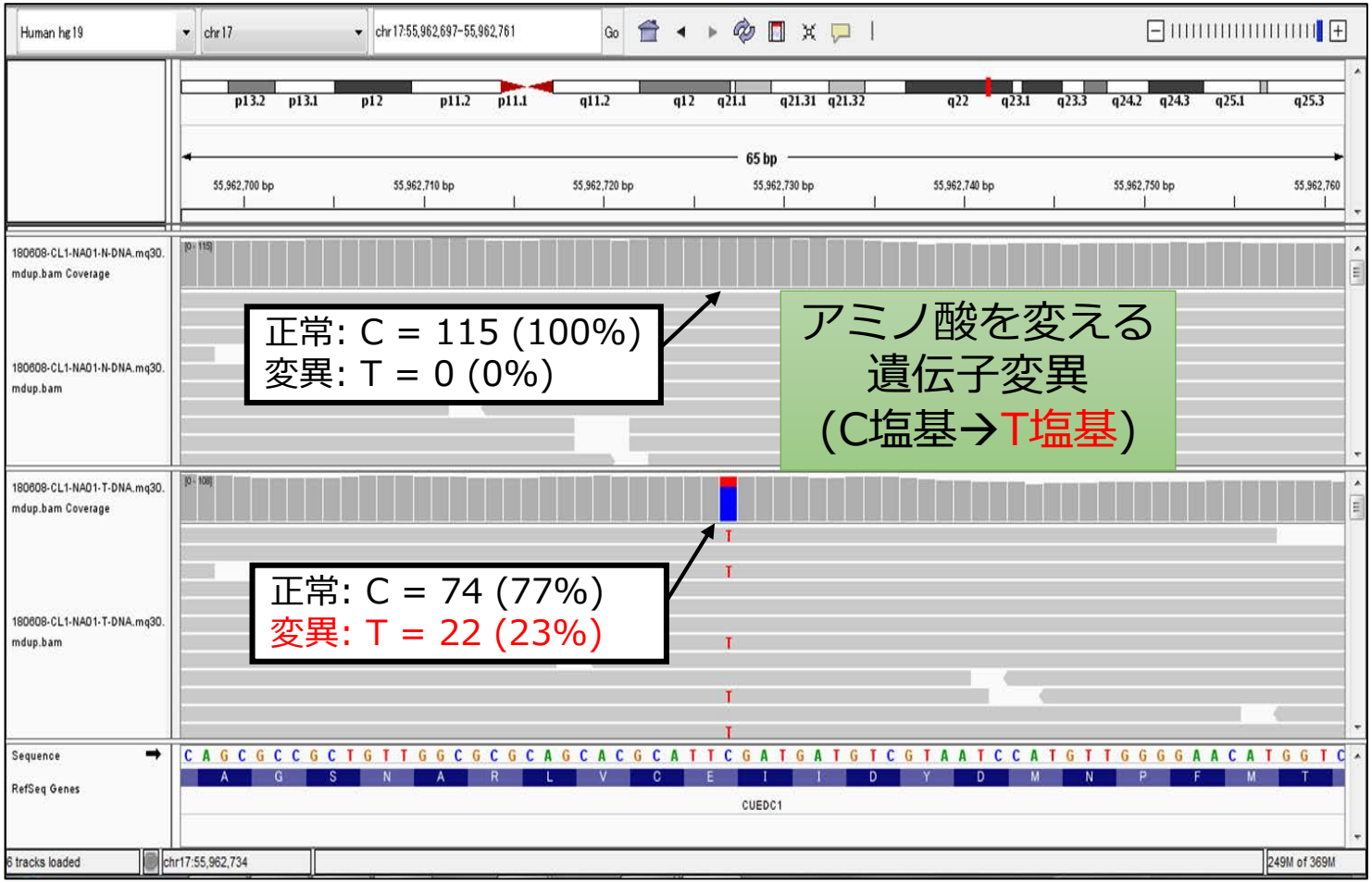
“non-synonymous mutation”
アミノ酸を変える遺伝子変異

Ile	Cys	Leu	Lys
ATA	TGT	CTG	AAG
↓			
Ile	Cys	**Gln**	Lys
ATA	TGT	CAG	AAG

adapted from Vogelstein et al. Science. 2013 (Science 2013;339:1546-58)

テクノロジーの進化：　次世代シーケンサーによる遺伝子変異の検出

次世代シーケンサー：
広範囲のDNA断片に対して大量並列し、結果を組み合わせてゲノム情報を
短時間かつ**低コスト**で取得できる



CPM社のアプローチ

Cancer Precision Medicine

(1) 適切な治療薬の選択

✓ **シーケンス解析**

(2) 新規がん治療法の開発

個別化免疫療法

✓ **ネオアンチゲンワクチン療法**

✓ **TCR遺伝子導入T細胞療法**

(3) がんスクリーニング率向上と早期診断

(4) 再発の早期発見と早期治療

✓ **リキッドバイオプシー**

CPM社のアプローチ

Cancer Precision Medicine

(1) 適切な治療薬の選択

✓ **シーケンス解析**

(2) 新規がん治療法の開発

個別化免疫療法

✓ **ネオアンチゲンワクチン療法**

✓ **TCR遺伝子導入T細胞療法**

(3) がんスクリーニング率向上と早期診断

(4) 再発の早期発見と早期治療

✓ **リキッドバイオプシー**

(1) 適切な治療薬の選択

Cancer Precision Medicine

遺伝子解析

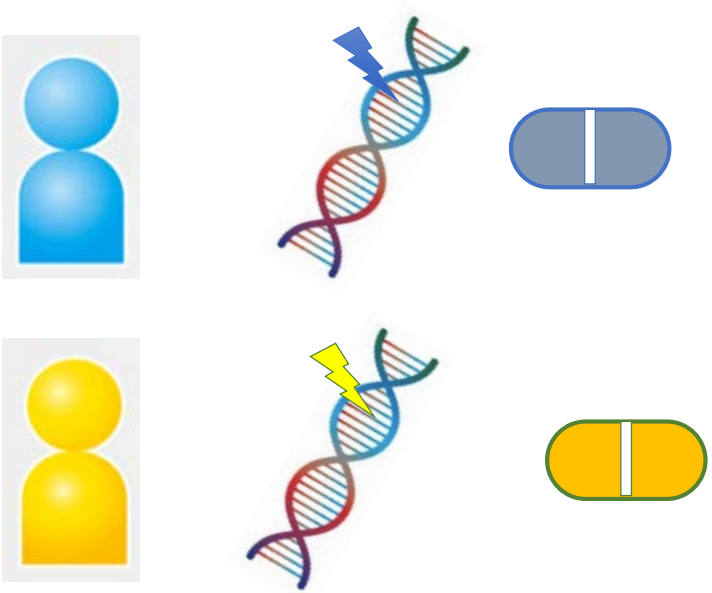
シーケンス解析技術

↓

分子標的薬の対象となる遺伝子変異

あり：10 – 30 %

遺伝子解析による分子標的薬の選択



なし：70 – 90 %

個別化がん免疫療法

- ✓ **ネオアンチゲン/オンコアンチゲンワクチン療法**
- ✓ **TCR遺伝子導入T細胞療法**

CPM社のアプローチ

Cancer Precision Medicine

(1) 適切な治療薬の選択

✓ シーケンス解析

(2) 新規がん治療法（個別化創薬）の開発

個別化免疫療法

✓ **ネオアンチゲンワクチン療法**

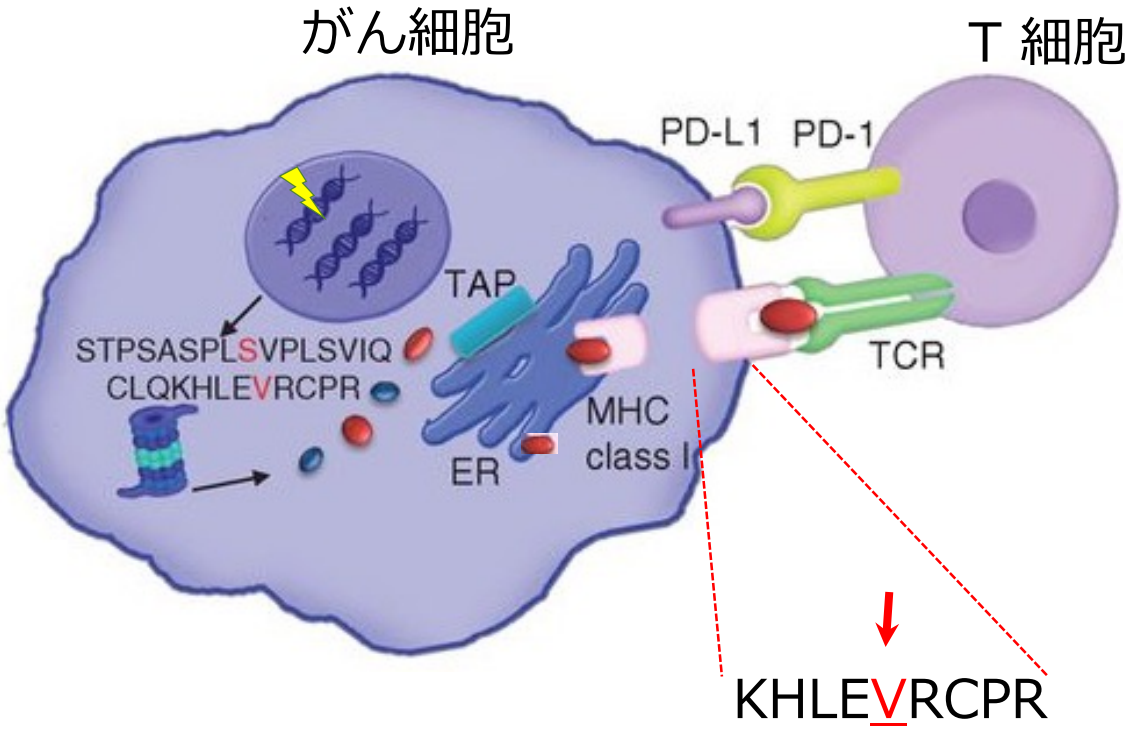
✓ **TCR遺伝子導入T細胞療法**

(3) がんスクリーニング率向上と早期診断

(4) 再発の早期発見と早期治療

✓ リキッドバイオプシー

(2) 新規がん治療法の開発　　“ネオアンチゲンとは”

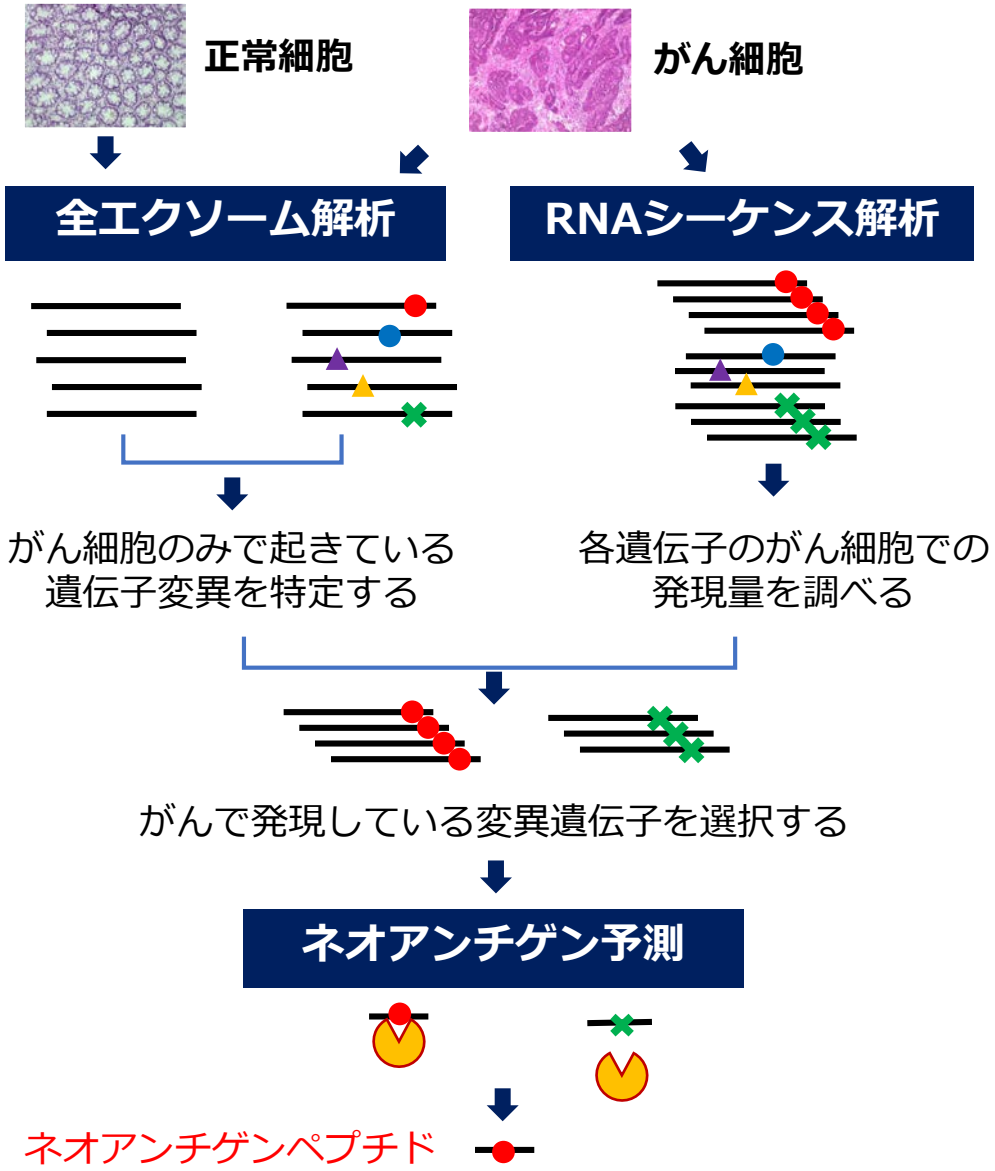


ネオアンチゲン

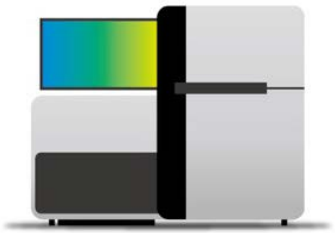
がん特異的な抗原となるネオアンチゲンは、アミノ酸を変える遺伝子変異を持つDNAから作られるタンパク質が分解してできるもので、分解してできたペプチドはMHC(HLA)分子とくっつくことで、がん細胞の表面に運ばれ、免疫細胞の攻撃目標となる。

adapted from Anagnostou et al., Cancer Discov. 2017 (Cancer Discov 2017;7:264-76)

ネオアンチゲン解析



シーケンス解析



MHC(HLA)分子
に結合する
遺伝子変異を含む
ペプチド予測

A*02:01	A*24:02
YLWEGNLEGT	AYFVTYVFFI
VMVALSCLL	PYARLGWAMTL
FLYTHQRMA	KFLAAAHNF
LLAPPGALPL	SYMGGMNRRPI
SMIGVLTQNA	SWGLPCTELF
… …	… …
…	…

(2) 新規がん治療法の開発　ネオアンチゲンによる治療例

Cancer Precision Medicine

Keskin et al., Nature. 2019

LETTER

Dana-Farber Cancer Institute

https://doi.org/10.1038/s41586-018-0792-9

Neoantigen vaccine generates intratumoral T cell responses in phase Ib glioblastoma trial

Derin B. Keskin[1,2,3,4,5,19], Annabelle J. Anandappa[1,4,19], Jing Sun[1,19], Itay Tirosh[3,6,19], Nathan D. Mathewson[1], Giacomo Oliveira[1], Anita Giobbie-Hurder[8], Kristen Felt[9], Evisa Gjini[9], Sachet A. Shukla[1,5], Zhuting Hu[1], Le[...] Phuong M. Le[1], Rosa L. Allesøe[1,10], Alyssa R. Richman[3,4,11,12], Monika S. Kowalczyk[3], Sara Abdelrahman[9], J[...] Sarah Charbonneau[13], Kristine Pelton[13], J. Bryan Iorgulescu[1,4,14], Liudmila Elagina[3], Wandi Zhang[1], Oriol C[...] Christine McCluskey[1], Lars R. Olsen[10], Jonathan Stevens[14], William J. Lane[4,14], Andres M. Salazar[15], Heathe[...] Patrick Y. Wen[1,4,16], E. Antonio Chiocca[4,17], Maegan Harden[3], Niall J. Lennon[3], Stacey Gabriel[3], Gad Getz[3,4], Aviv Regev[3], Jerome Ritz[1,2,4], Donna Neuberg[8], Scott J. Rodig[4,9,14], Keith L. Ligon[3,4,13,14], Mario L. Suvà[3,4,11], Kai W. Wucherpfennig[4,7], Nir Hacohen[3,4,12], Edward F. Fritsch[1,3,18], Kenneth J. Livak[1,5], Patrick A. Ott[1,2,4], [...] David A. Reardon[1,2,4]*

ネオアンチゲンペプチドワクチン

8人の膠芽腫患者

手術後、7～20 種のネオアンチゲンペプチドを投与

患者は手術から7～23か月生存

2人の患者に強いネオアンチゲン特異的Tリンパ球の誘導が確認

Hilf et al., Nature. 2019

LETTER

Immatics Biotechnologies
Heidelberg University

https://doi.org/10.1038/s41586-018-0810-y

Actively personalized vaccination trial for newly diagnosed glioblastoma

Norbert Hilf[1,26], Sabrina Kuttruff-Coqui[1,26], Katrin Frenzel[2], Valesca Bukur[2], Stefan Stevanović[3,4], Cécile Gouttefangeas[3,4,5], Michael Platten[6,7,8], Ghazaleh Tabatabai[3,4,9], Valerie Dutoit[10], Sjoerd H. van der Burg[5,11], Per thor Straten[5,12,13], Francisco Martínez-Ricarte[14], Berta Ponsati[15], Hideho Okada[16,17], Ulrik Lassen[18], Arie Admon[19], Christian H. Ottensmeier[20], Alexander Ulges[1], Sebastian Kreiter[2,5], Andreas von Deimling[6,7], Marco Skardelly[9], Denis Migliorini[10], Judith R. Kroep[11], Manja Idorn[12,13], Jordi Rodon[14,22], Jordi Piró[15], Hans S. Poulsen[18], Bracha Shraibman[19], Katy McCann[20], Regina Mendrzyk[1], Martin Löwer[2], Monika Stieglbauer[3,5], Cedrik M. Britten[2,5,23], David Capper[6,7,24], Marij J. P. Welters[5,11], Juan Sahuquillo[14], Katharina Kiesel[1], Evelyna Derhovanessian[2], Elisa Rusch[3,5], Lukas Bunse[6,7], Colette Song[1], Sandra Heesch[2], Claudia Wagner[1], Alexandra Kemmer-Brück[2], Jörg Ludwig[1], John C. Castle[2,25], Oliver Schoor[1], Arbel D. Tadmor[21], Edward Green[7,8], Jens Fritsche[1], Miriam Meyer[1], Nina Pawlowski[1], Sonja Dorner[1], Franziska Hoffgaard[1], Bernhard Rössler[1], Dominik Maurer[1], Toni Weinschenk[1], Carsten Reinhardt[1], Christoph Huber[2], Hans-Georg Rammensee[3,4], Harpreet Singh-Jasuja[1], Ugur Sahin[2], Pierre-Yves Dietrich[10] & Wolfgang Wick[6,7]*

ネオアンチゲンペプチドワクチン

15人の膠芽腫患者へ個人化ワクチン治療

正常型ペプチド+2種のネオアンチゲンペプチド併用

8/15人の患者が24か月以上生存

11/13のネオアンチゲンペプチドがTリンパ球を誘導

ネオアンチゲン関連臨床試験登録：107 件
（NIH臨床試験データベースより、
2019年4月現在）

ネオアンチゲンワクチン接種は強力ながん細胞特異的免疫反応を誘発する

Cancer Precision Medicine

樹状細胞（DC）ワクチンコンソーシアムとの提携

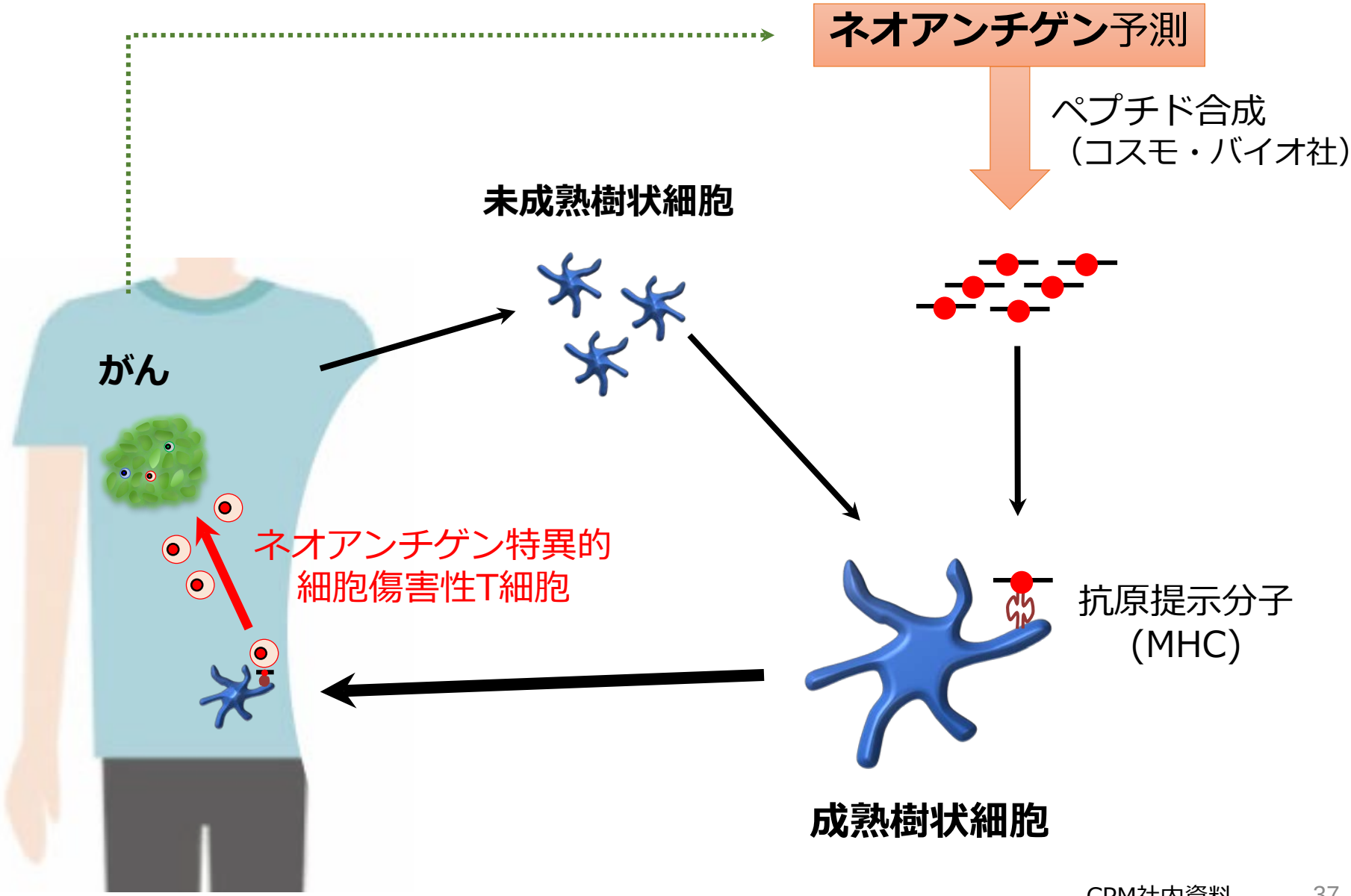
◆ **DCワクチンコンソーシアム**：大阪、福岡、東京を拠点とする３医療法人

2017年
✓ OTSがライセンスを保有する**オンコアンチゲンペプチド**について**DCワクチン療法**への非独占的実施権を供与

2018年
✓ CPMでの大規模遺伝子解析による**ネオアンチゲン予測解析**について研究開発を共同で推進

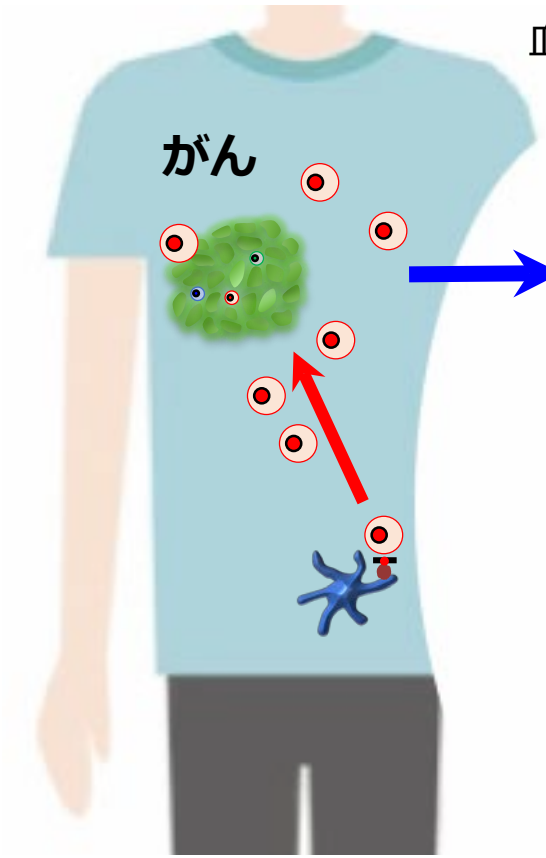
2019年
✓ **ネオアンチゲン療法での抗原が発現され、T細胞がクローン化されているか効果測定を行う。**
（ELISPOT解析およびテトラマー解析の実施）

ネオアンチゲン樹状細胞（DC）療法

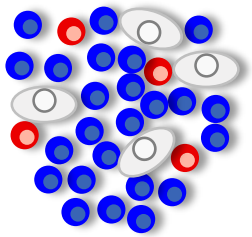


TCR遺伝子導入T細胞療法

ネオアンチゲンDC
療法後

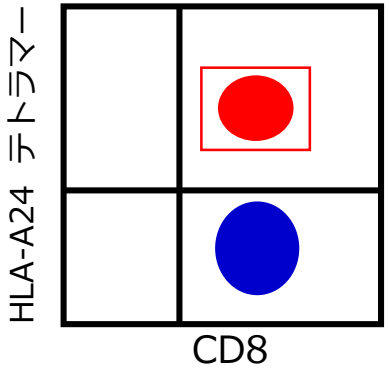


血液から分離した
末梢血単核球

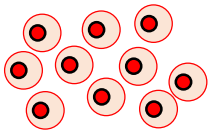


ペプチド刺激
による
前培養

テトラマー解析



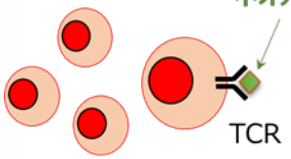
**ネオアンチゲン由来
ペプチド特異的
CTLクローン**



TCR解析

TCR遺伝子情報

TRAVxx, TRAJxx
TRBVx-x, TRBJx-x



CPM社のアプローチ

Cancer Precision Medicine

(1) 適切な治療薬の選択

✓ シーケンス解析

(2) 新規がん治療法の開発

個別化免疫療法

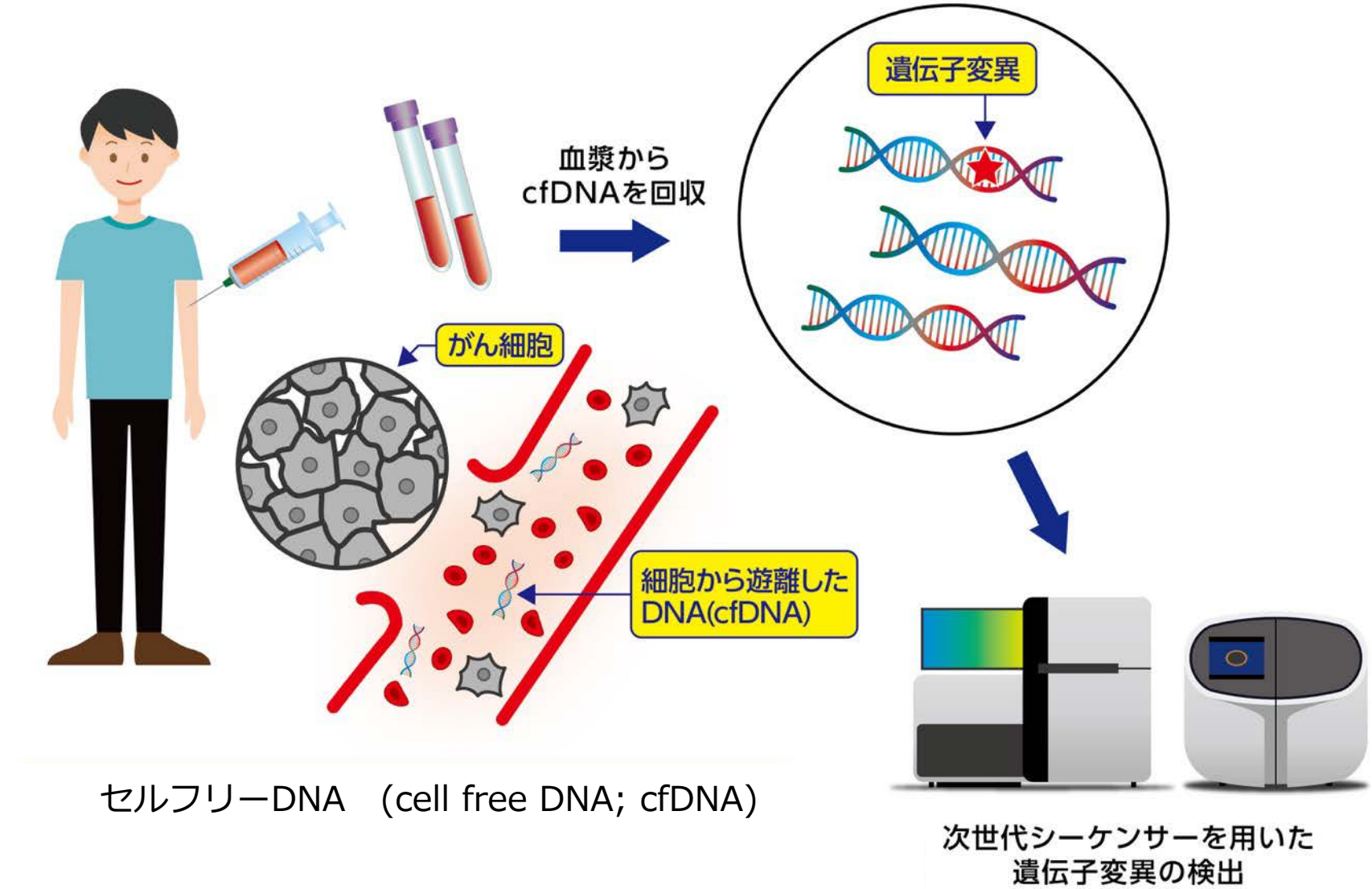
✓ ネオアンチゲンワクチン療法
✓ TCR遺伝子導入T細胞療法

(3) がんスクリーニング率向上と早期診断

(4) 再発の早期発見と早期治療

✓ **リキッドバイオプシー**

リキッドバイオプシー

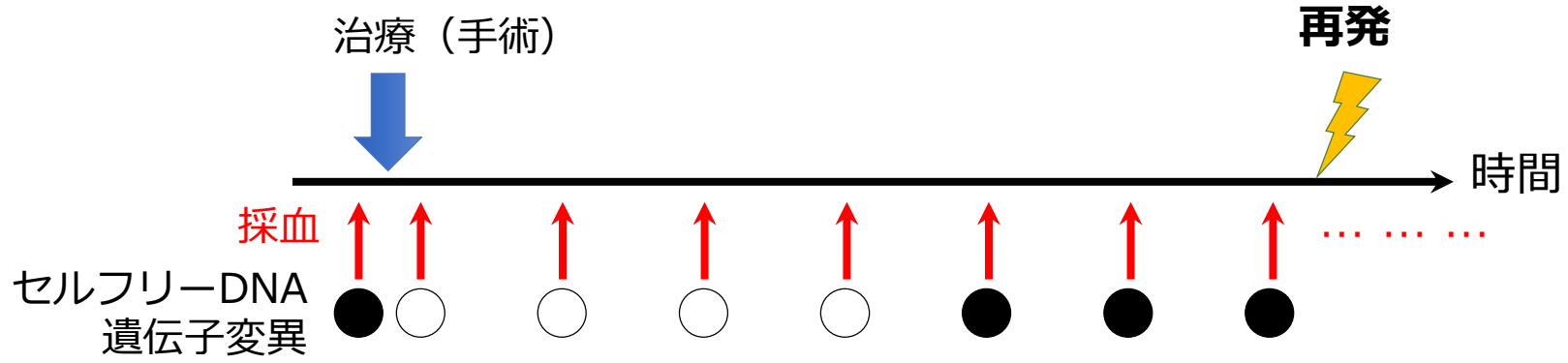


セルフリーDNA　(cell free DNA; cfDNA)

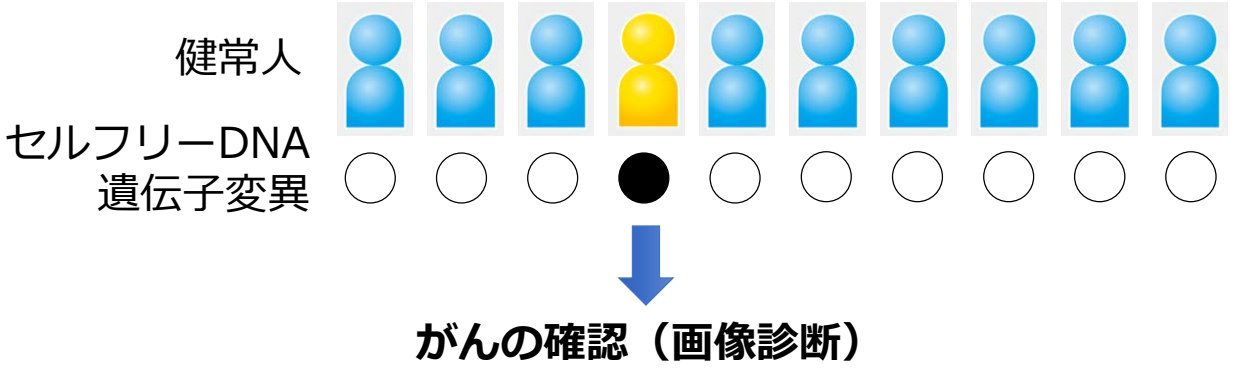
リキッドバイオプシーの応用

Cancer Precision Medicine

がん治療効果のモニタリングおよび再発の早期発見



がんスクリーニングと早期診断

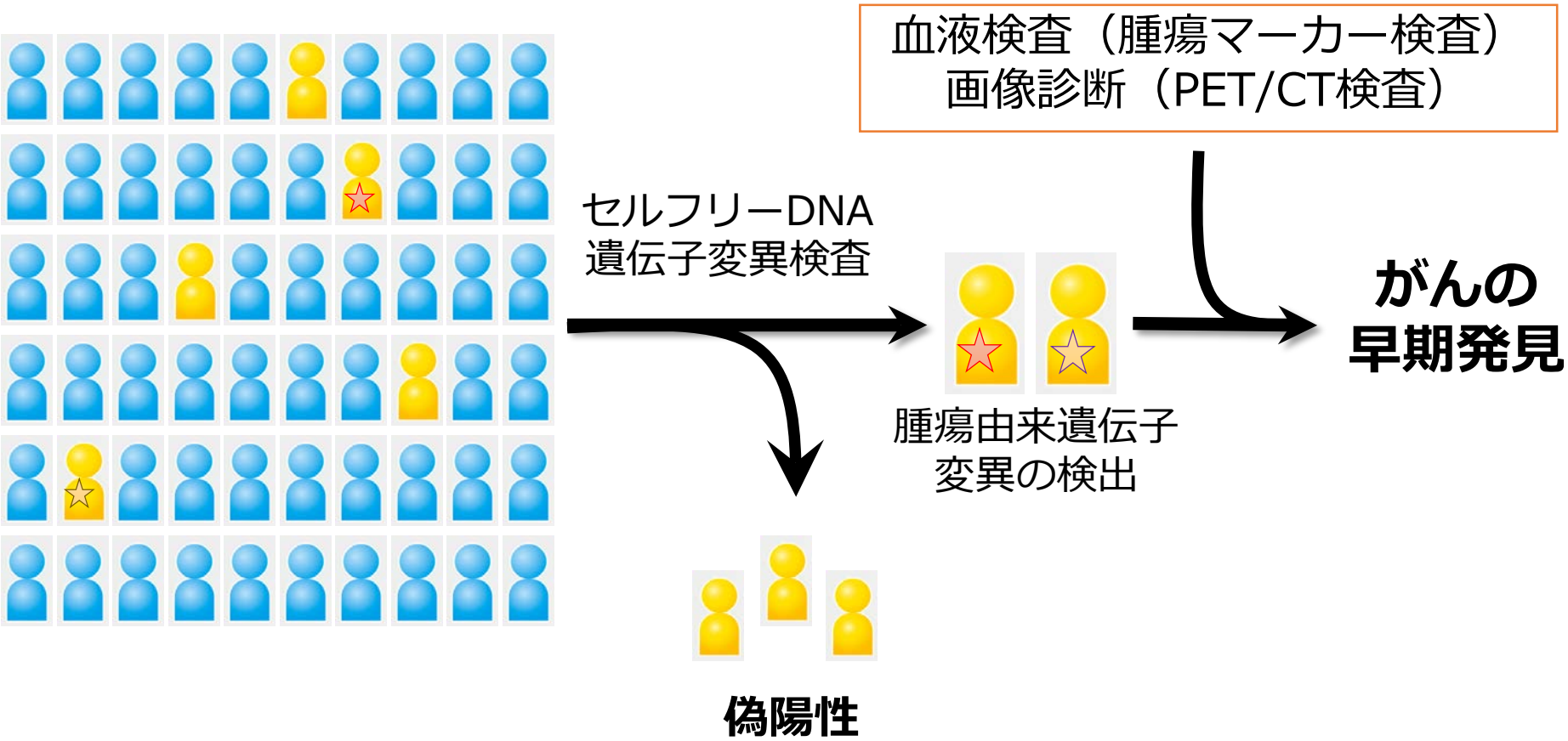


がんの遺伝子変異情報に基づいた薬の選択

がんの早期発見法の検討

Cancer Precision Medicine

がんスクリーニング



リキッドバイオプシー事業　共同研究他

Cancer Precision Medicine

契約先	概要
IMSグループ医療法人社団明芳会 IMSグループ医療法人財団明理会 株式会社アイル IMSグループ 職員数： 21,709 名　（2017年） 総病床数： 12,493 床　（2017年）	胃がん、大腸がんの手術後 再発の早期発見を目的とした 共同研究
公益財団法人がん研究会 外来患者数： 418,944 名　（2016年） 手術数： 8,548 件　（2016年）	固形がんの診断を目的とした 技術・改良、新規技術の共同研究
セコム医療システム株式会社 医療法人社団あんしん会 四谷メディカルキューブ セコム健康くらぶKENKO 提携医療機関	リキッドバイオプシーによる がんの早期発見法の検討にかかる 共同研究

Cancer Precision Medicine

検査受託サービス

- ✓ 全エクソーム
  RNAシーケンス
  ネオアンチゲン解析
- ✓ リキッドバイオプシー
- ✓ TCR/BCRレパトア解析
- ✓ 免疫反応解析

研究開発

- ✓ ネオアンチゲンワクチン療法
- ✓ TCR遺伝子導入T細胞療法

適切な治療と希望を
全てのがん患者さんへ

本資料は、投資者に対する情報提供を目的として記載したものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。本資料発表日現在の将来に関する前提、見通し、計画に基づく予測が含まれております。これらは現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、今後の経済情勢、市場の変動等に関わるリスクや不確定要因により、実際の業績は予測と大きく異なる可能性があります。

当社の事業計画に対する評価及び投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。